

# KELES Newsletter

## 関西英語教育学会報 2011年度 第3号

事務局：〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲1-2-1

神戸大学 国際コミュニケーションセンター 横川博一研究室内

Phone: 078-803-7689 E-mail: yokokawa@kobe-u.ac.jp

学会ホームページ: <http://keles.web.infoseek.co.jp/> 2012年3月12日発行



### 巻頭言

## 2011年度を振り返って —英語教育への期待と今求められていること—

関西英語教育学会幹事 泉 恵美子 (京都教育大学)

厳寒の冬がようやく終わろうとしております。今年度は実にさまざまなことがありました。3月11日の東日本大震災から一年。未曾有の被害を受けた被災地では、今も多くの方々が辛い生活を強いられています。17年前に阪神・淡路大震災を経験した私たちも他人事とは思えず、一日も早い復旧・復興を祈らずにはおれません。人々の絆とコミュニケーションの大切さ、幸せとは、人生とはといった大きな問いが投げかけられた一年だったように思います。これまでの価値観が通用せず、リスクや想定外の事態にもすばやく対応し、無から何かを創り出さなければならない時代、キー・コンピテンシーを身につけ、未来を逞しく拓いていく人材の育成が求められています。その際、教育、言語力、国際共通語としての英語の重要性は益々高まることでしょう。

さて、外国語教育でも大きな動きがありました。小学校外国語活動必修化、また、6月30日には文部科学省より、『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～』が出されました。その5つの提言とは以下の内容です。

①生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検討する。

②生徒にグローバル社会における英語の必要性

について理解を促し、英語学習のモチベーション向上を図る。

③ALT, ICT等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす。

④英語教員の英語力・指導力の強化や学校・地域における戦略的な英語教育改善を図る。

⑤グローバル社会に対応した大学入試となるよう改善を図る。

各学校で到達目標を設定し、生徒に英語運用能力をつけること、英語学習への動機づけを高めることなどが盛り込まれております。小学校では4月から新たに“Hi, friends!”が配布されます。授業時間数が増える中学校や、『コミュニケーション英語』といった新科目が登場し、英語での授業が求められている高等学校、学士力と仕事で英語が使えるグローバル人材の育成が課せられている大学など、英語教育界も激動の時代に入っております。KELESもさまざまなニーズや期待にも応えつつ、学会として何が大切かをじっくり考え取り組んでいく責務があるように思います。

私自身も教員養成や研修に携わり、小中高の授業参観や教員研修のお手伝いをさせていただいておりますが、先生方のご苦勞は大変なものがあると感じております。また、教育の質を上げるのは教師次第であるとも感じます。英語力やスキルがあり、英語

教育に関するさまざまな知識があっても、優れた魅力ある授業ができるとは限りません。やはりそこには教師の人間性や教育への信念と熱意、学習者の声に耳を傾け授業改善に取り組もうとする姿勢、そして何より生徒への深い愛情が必要なのではないのでしょうか。「教師が変われば授業が変わり、授業が変われば生徒が変わる」と言われますが、ポストメソッド、まさに **reflective practitioner** が求められています。教員志望の学生と、「教育とは何か」、「よい授業とは」、「英語教師に求められるものは」などと議論をしつつ、若い世代を育てることの重要性や年齢を超えて互いに学び合う同僚性の楽しさや意義も感じます。きっとどの職場でも同じではないのでしょうか。

さて、今年度もあとわずかですが、静かに今年を振り返り、また新たな目標を持って前進できればと思います。英語教師として、生徒にことばとコミュニケーションの大切さを伝え、英語を用いて思いや考えを伝えあえる英語力をつけさせているだろうか、グローバルな視野を持ち、世界の人々とともに諸問題を解決しようと努め、恒久平和に貢献できるような人材を育てているだろうかなど、原点に立ち戻って考え、話しあえればと思います。教師・研究者・学習者として生徒とともに日々学び続け、自律した教員として絶えず研鑽し、使命を果たしていきたいものです。

## 報告

## 関西英語教育学会 2011 年度 K E L E S セミナー

### 第 23 回セミナー（京都・滋賀地区）

開催日：2011 年 11 月 6 日（日）

会場：京都教育大学・藤森学舎

#### 「生徒の間違いを減らしませんか

##### —Intake Reading のすすめ—

講師：齋藤 栄二先生（京都外国語大学）

数々の英語指導法の著書を世に送り出されて 50 年、齋藤先生が今なお感じる「生徒の間違いがなかなか減らないね」がこの指導法のすすめの出発点。「日本語の語順どおり英単語を並べる」、「冠詞の扱い」など、いっこうに減らない間違いの現状から、正しいモデルをしっかりと内在化できるプラクティスが必要と考えられた。

**Intake Reading** とは「学習者の脳に英文を沈めるための読み」で、「読み上げられた英文を何も見ずに正しく復唱する練習」という簡単な指導法である。一文からもう少し長い文の復唱ができるかどうかを **all or nothing** で評価する。「すぐに取り組める簡単

な指導法で豊かな教育効果を上げる」これが齋藤流指導法の極意である。この指導法の根底には、生徒は「教師の説明したことは、たいがい忘れる」「教師が強調して説明したことは、覚えていることもあるが、忘れることもある」「生徒は実際に自分でやったことは忘れない」があり、漢方薬のように日々実践（摂取）することでじわじわ効いてくると話された。同名の近著にまとめられている。いつもながら、現職教員に温かなまなざしを送る講演であった。

報告者：中井 弘一（大阪女学院大学）

#### 「コミュニケーションに活かす文法指導

##### —意味順指導法の提案—

講師：田地野 彰先生（京都大学）

本講演では、文法指導の際に学習者に対して学習項目の見取り図を示し、到達目標を明確にする点で学習意欲の向上も図る方法の提案を聞くことができた。

英語が固定語順言語であることを踏まえ、学習者の間違いを許容範囲に留まらせる（**Global Error**

ではなく Local Error) ために語順指導が重要という認識の上で「意味順指導法」を教示して下さった。5W1H を押さえ、語順の誤りがなければ、文法的には未完でも伝達には十分足りる英文を作成が可能、という端的な事実を学習者にも示そうということで、先生は意味順ノート(下記 URL 参照)を開発された。<動作主(who), 動作(does), 受け手・対象物(who(m)・what), 場所(where)>の語順を示したノートの利用で、語順を間違えずに英作文ができるようになるというものである。英語の初期学習者にとって難解な用語ではなく、わかりやすい語で提示されていることでも、画期的な指導法であると感じた。5文型の教え込みに陥りがちな小生としては、有用なアドバイスを得ることができたと感謝している。明日からの授業の一環に、是非活用したい。

注：<http://www.kyokuto-note.co.jp/special/imijun/message.html>

報告者：中木場 めぐみ  
(尼崎市立南武庫之荘中学校)

### 「思考力と表現力をつなげる協同的な言語学習」

講師：今井 裕之先生(兵庫教育大学)

新学習指導要領では「習得した技能や知識」を「活用する」学習の必要性が示されているが、現場ではその方法や評価に悩む教師の姿が見受けられる。生徒の思考内容と既習の言語表現技術のギャップが問題点の1つであるが、その2つをつなぐ事例を協同学習理論を参考に提示された。現実として、授業で扱う単元の「話題」と「言語材料」の分離指導が行われていることが多いが、英文の内容に関連した思考の掘り起こしから英語による表現へとステップを踏むことの重要性が示された。教師の役割は、生徒が考えたことを、生徒の英語力に基づいた表現に導くことであり、教師が用意した答えに合わせることではない。参加者は生徒の立場でイディオムの導入やイラストの人物の説明など、単なるペアワークやグループワークではなく、プレッシャーを感じつつも有意義な活動に巻き込まれていった。他者または

他のグループとの関わりの中で「作業中に生まれる“ずれ”を楽しむ」ことが、「表現しよう・表現したい」という気持ちにつながることを認識することができたご講演であった。

報告者：山本 誠子(神戸学院大学)

### 第24回セミナー(大阪・兵庫地区)

開催日：2011年12月18日(日)

会場：龍谷大学・大阪梅田キャンパス

#### 「英語音声指導のポイント：関連分野の研究成果をふまえて」

講師：門田 修平先生(関西学院大学)

門田先生が、音声指導について話をされると聞くと、それが心理言語学的な見地からのものであることとシャドーイングを話題にされるだろうことは予想がつくのだが、いつも驚かされるのは、話の中でこれでもかと繰り返される多彩な実証データ群である。同じ繰り返し練習でも、リピーティングとシャドーイングという異なる練習形態の違いは、再生率、発話時間、ワーキングメモリ等に言及したデータを用いる。これは、記憶保持に関わる認知資源の使われ方において二つの異なりが捉えられると考えてのことだ。また、効果的な練習形態としてのチャンク単位の繰り返しや音読との併用を話題にする場合は、発話音声の強さ、長さ、高さなどの音響データを繰り返し出してくる。これは音読とシャドーイング訓練は、一言で音韻符号化に関わる認知作業とは言っても、それらが極めて運動的な性格の強い練習法と考えられていることだろう。周到的な理論的基盤に支えられている言説は力強い。「今までかかっていた霧が近い将来に晴れる気がする」とは懇親会での氏の弁であるが、霞が晴れた時に氏が見ているのか、今から楽しみなことである。

報告者：玉井 健(神戸市外国語大学)

#### 「実践！英語のリズム・イントネーションの指導」

講師：大和 知史先生(神戸大学)

まず、大和先生ご自身の自己紹介。ご高名な先生方との共演に謙遜されていたが、ユニークな自己紹

介で、会場から笑い声も聞こえる見事な「つかみ」だった。ご講演の趣旨は「プロソディ要素を関連づける指導の3原理」に基づき、音節・語強勢が文イントネーションまですべてにつながっているという理論に基づく実践の提案であった。

第1原理「母音のあるところに拍がくる（語強勢の確認）」：英語は日本語とは異なり、語強勢のある音節のピッチの動き方が文単位のイントネーションを決定づける（例：“normally” vs 「梅田に」）。第2原理「拍が2以上になれば強勢を」：英語においては、拍が2つ以上続いた場合は必ず強弱のパターンが生まれ（Mary | says she | wants to | see him.），それが、語・文レベルのアクセントおよび文全体の強勢拍リズムのもとになる。第3原理「核配置に関する3つの基本原理」：イントネーション核の付与においてさらに詳しい規則。

全体にわたり、学術的な理論に基づきながらも、実践例を多く示され、参加者も積極的にタスクを楽しめる有意義なご講演であった。

報告者：菅井 康祐（近畿大学）

### 「楽しみながら教えよう！英語の発音のしくみ」

講師：里井 久輝先生（龍谷大学）

ご講演では、今、テレビで大人気の里井久輝先生をお迎えして、発音への苦手意識、恐怖心を克服して、ちょっとしたコツで見違えるようになる英語の音声指導のお話を頂戴しました。会場には、学会員の皆さん、テレビを通じてのファンの方も多数いらして、テレビのエピソードも交え、テレビ同様の里井先生の軽妙なお話と楽しい洒落で、あっという間に時間が過ぎてしまいました。ご講演では、あたかもオーケストラのようにすべての発音の要素を同時にコントロールして、母語話者と同様の自然に聞こえる音のコントロール（判明度・明瞭度の高い *intelligibility* を高める音声指導）のコツを楽しく、ゆっくり、着実に身につけるご指導が披露され、とりわけ、テレビでの歌を使ったご指導を取り上げて、必ずしも体系的でなくてもいいから楽しさを犠

牲にしない指導（会場の皆さんにもご指導を披露）というお話、日本人に最適な音声指導ができるのは、日本人による音声指導の介在があってこそというお話は、会場の皆さんへの英語の音声・発音指導に向けた何よりも力強いエールとなりました。

注：里井久輝先生は、2011年10月～12月まで、NHK教育テレビ『3か月トピック英会話 歌って発音マスター！～魅惑のスタンダード・ジャズ編』の講師を務められました。

報告者：大嶋 秀樹（滋賀大学）

### 第25回セミナー（奈良地区）

開催日：2012年1月29日（日）

会場：天理大学・杣之内キャンパス

第25回セミナーは、1月29日（日）に、「英語授業の標準（当たり前）を見直す」をテーマとして、天理大学英語教育研究会、Nara JALT, NET Forumと合同で開催され、教員、学生など、約100名の参加がありました。

発表1「新米教師の通信簿—出来たこと、出来ないこと—」では、中小野一八先生（橿原市立畝傍中学校）から、教員として初めての1年間を振り返り、多様な学力を持つ生徒たちを相手に自分自身の授業を確立しようと取り組んだ様々な実践が紹介されました。生徒のモチベーションを高めるために開発したハンドアウトや音読練習の工夫を紹介しながら、「標準的な」授業の手順を踏襲することへの疑問や悩みが吐露され、今回の第一発表にふさわしい提起がなされました。

発表2「小学教員を目指す高校生のための音声活動を中心とした指導」では、阪田安弘先生（奈良県立高田高等学校）から、教育コースの生徒たちを対象とした発音指導を中心とした1年間の取り組みに関する研究が報告されました。英語の個別音／韻律の習得を目指した様々な明示的／暗示的な練習に参加させることにより、いかに生徒たちの発音が向上し、それが彼らの自信を高めたかについて、生徒たちの活動を記録した録画ビデオを多用しながら紹介していただきました。

発表 3「英語科全体の協働的取り組み」では、山本享史先生、成瀬美沙先生、齊藤元康先生（天理高等学校）による、英語科全体による「統一シラバスの作成」の取り組みが報告されました。個々の教師により指導法や目標が異なっていた英語科に果敢に働きかけ意識改革を迫っていった過程が紹介されました。

ワークショップ“To Use Tech or Not to Use Tech: Is This Even the Right Question?”では、Matthew Apple 先生（奈良工業高等専門学校）のリードのもと、参加者同士が交流しながら「そもそも英語教育における Tech とは何か」を探りながら、最後は目的に応じたハイテクとローテクの使い分け

が必要なことが明らかにされました。

最後は、鈴木寿一先生（京都外国語大学、関西英語教育学会副会長）に「目からウロコの教師塾：英語授業自己診断テスト」と題して講演をしていただきました。ご講演では、これまで先生が研究され広めてこられた「英語授業自己診断テスト」をもとに、授業改善へのアドバイスが述べられました。それぞれの「標準的」授業手順についての効果が検証され、まさに目からウロコが取れる思いを参加者全員が共有し、自らの授業を点検する良い機会をいただきました。

報告者：中井 英民（天理大学）

## 報告

### 第 15 回卒論修論研究発表セミナー

開催日：2012 年 2 月 11 日（土） 会場：京都外国語大学

第 15 回卒論修論研究発表セミナーが、2012 年 2 月 11 日（土・祝）に、京都外国語大学において開催された。

大学英語教育学会関西支部および外国語教育メディア学会関西支部の共催にて開催された今回のセミナーでは、合計で 43 件（病気による発表キャンセル 1 件を除く）の研究発表が行われた。午前の部では卒業論文 12 件、午後の部では修士論文 24 件の口頭発表があり、各会場とも、コメンテータの先生方やオーディエンスを交えて、活発な議論が行われていた。さらに、今回初めての試みとして、3 件の卒業論文、4 件の修士論文の計 7 件のポスター発表も行われた。それぞれのポスターの概要のミニプレゼンテーションに続いてのコアタイムでは、時間ぎりぎりまで各ポスターの前に多くの人が集まって、発表者と意見を交わしていた。

学生・院生たちの研究発表に引き続き、スペシャル・トークとして、広島大学大学院教授の深澤清治先生をお招きし、「教育とリサーチの接点をどう図る

か」というタイトルで、講演をしていただいた（概要については下記参照）。

新しい企画と共に、15 回という「節目」を迎えた今回のセミナーは、176 名もの参加者が集まる盛会となった。なお、卒業論文・修士論文の研究発表の発表者とタイトルの一覧、および発表要旨は、関西英語教育学会ウェブサイト（<http://www.keles.jp/seminar/gmt/15/program/>）にてご確認いただきたい。

#### <スペシャル・トーク>

学生たちの卒論・修論の研究発表の後、広島大学大学院教育学研究科教授である深澤清治先生によるスペシャル・トークが行われた。「教育とリサーチの接点をどう図るか」と題されたトークでは、深澤先生ご自身がこれまで英語教育の領域で卒論・修論を担当してきた経験やご自身の研究領域である語用論能力の習得研究などを踏まえ、英語教育研究・第二言語（外国語）教育・習得研究の発展の系譜を振り

返りながら、今後のあるべき方向性として、教員・教育研究者は教育と実践の不断の **triangulation** を行う “**informed practitioner**” を目指すべきである、という提案がなされた。

最初に、深澤先生ご自身が担当された卒論・修論タイトルからキーワードを抽出して見せて下さったり、実際の論文概要を紹介下さった。発表を終えたばかりの卒論・修論生には、同好の士がいるものだと惹きつけられたことだと思う。

次に、これまでの英語教育・外国語教育研究の歴史を振り返り、初期の英語教育・外国語教育研究は、「究極の指導法」を求めるアートであったが、60年代・70年代以降、応用言語学というサイエンスへと変貌を遂げた後、理論と実践との融合を求めるアクション・リサーチといった形で独自の発展をしてきている、と述べられた。このことは、全国英語教育学会の学会誌である *ARELE* に採択された論文の傾向からも読み取れるとして、90年代初頭から15年間程度のこれまでの採択論文テーマの分析を示された。

また、ご自身の研究分野である学習者の語用論能力の育成について、研究領域の概要や歴史的流れを確認され、よくある言説としての「留学に行ったらそれでよし」ではなく、上級英語学習者に何ができるのか、といった観点について議論され、ご自身の研究をもって教育とリサーチとの接点を示された。

今後の第二言語（外国語）研究の流れとしては、**teaching** の研究から **acquisition** の研究へと移り、最近では **learning** の研究へと焦点が移っている点を指摘され、**process** をきちんと記述する「である」(**sein**) 研究への移行の重要性を指摘された。こうした流れを受けて、卒論・修論を仕上げ言語教育に従事する人間には、実践と研究を架橋する意識をしっかりと持った “**informed practitioner**” を目指さなければならないと述べられた。

そして、最後には、論文執筆のヒントとして、主要な学術雑誌の文章構造の特徴や、使用される動詞やつなぎ語や時制などの傾向なども示して下さい、

卒論・修論生にとって具体的な事例の紹介もして下さい。

今回の深澤先生のトークを受けて、卒論生・修論生は、自身が完成させた卒論・修論が、英語教育・外国語教育研究・習得研究全体の中でどこに位置づけるのか、今後どう教育研究を継続するのか、を意識させられたよい機会に、また日々教育研究に従事している教員にとっても、自身の教育実践・研究を **triangulation** する良い機会となったのではないかと感じた。

報告者：大和 知史（神戸大学）

橋本 健一（近畿大学）

### <発表者体験記>

#### 【卒論】

中田 絢子さん（京都教育大学）

私は今回の卒論・修論研究発表セミナーで卒論のプレゼンテーションを行いました。その準備として、限られた時間の中で卒論の内容についていかに分かりやすく簡潔に説明するか、また聞き手の視点に立ち、どこで聞き手が疑問を持つかということを考え、自分のプレゼンの構成や内容を考える必要がありました。中でも特に難しかったのは、自分が最も伝えたい部分を選ばなければならないという点においてです。聞き手の視点を意識した発表の重要性を考えつつの準備となりました。しかし、このように自分の伝えたいことを精選していくプロセスがあったからこそ、自分の卒論の内容をもう一度深く理解した上で、自信を持って発表に臨み、参加者の方々とのやりとりを自分なりに楽しむことができたのだと思います。今回のセミナー発表を通して、参加者の皆様からの疑問・質問やコメンテータの先生方からの貴重なコメントをいただき、まだまだ未熟な論文であるということを感じつつも、他者の視点を通した批判・評価がいかに大事なものであるということも実感でき、非常に貴重な機会になりました。参加させていただき、本当に有難うございました。



## 【ポスター】

横内裕一郎さん（立命館大学）

はじめに、第15回卒論・修論研究発表セミナーを開催、運営をしていただいた関西英語教育学会の先生方、また、これまでご指導くださった先生方、そして発表をお聞きくださった皆様にお礼申し上げます。

私は、これまでの研究成果をポスター形式にて発表する機会をいただきました。今回のセミナーからポスター発表が導入されたわけですが、ポスター発表を通じ、従来の発表形式より多くのコメントをいただくことができたと思います。多くの方からアドバイスや激励のお言葉をいただいたことは、今後の研究活動への大きな励みになりました。また、様々な個性あふれる発表を拝聴し、勉強させていただくと共に、大きな刺激を受けました。従来の学会や研究会などでは質問したくても気後れしてしまうこともありましたが、発表者全員が学生と言うこともあり、疑問点を素直に質問でき、発表者、来場者共に良い経験を積むことができたと思います。来年4回生、修士2回生になる方は是非、来年このセミナーで発表して他の来場者の方と共に学び合い、励まし合ってほしいと思います。

## 【修論】

富和由有さん（University of Warwick）

学部卒業時に続き参加させていただいた KELES 卒論・修論発表セミナーは、多くの出会いに満ちたものでした。私自身の発表については、経験豊富な先生方、学生仲間から貴重なフィードバックをいただきました。また、同じ英語教育の興味を異なる色々な切り口から検証される多くの発表・講演を拝聴したことも、視野を広げる新たな勉強の機会となりました。

「学会での出会いは、ずっと続いていきます」とは閉会時の鈴木寿一先生のお言葉です。4月から教室という新たな場所で日本の英語教育を考えていこうとする私にとって、様々な立場で、そして視点から、英語教育を考えておられる方々にお目にかかれたことは非常に有難いことでした。今回の出会いを大切に、春からも頑張っていこうと気持ちを新たにすると同時に、KELES が私の home になっていくことを確信している所存です。

最後になりましたが、今回貴重な場を与えてくださり、時間を共有してくださった先生方と仲間達に、心より感謝いたします。

## 学会事務局からのお知らせ

### ◆2012 年度（第 17 回）研究大会 発表募集

2012（平成 24）年度関西英語教育学会（第 17 回）研究大会が、下記の要領で開催されます。

- ◇日 時 2012（平成 24）年 6 月 9 日（土）  
9:00～17:40（8:30 受付開始）（予定）
- ◇会 場 京都外国語大学・1 号館 6 階  
〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6  
<http://www.kufs.ac.jp/aboutkufs/campus/access/>

- ◇参加費 関西英語教育学会会員：無 料  
非会員（一般）：2,000 円  
非会員（学部学生・大学院生）1,000 円  
（※学生証を提示して下さい）

つきましては、広く英語教育にかかわる「研究発表」および「事例報告」のご発表を別紙ご案内の通り、募集いたします。応募期間は、2012 年 3 月 19 日（月）～4 月 20 日（金）までで、学会ホームページにてご応募いただけます。奮ってご応募ください。多くの会員の皆様のご発表をお待ちしております。

## ◆各種会議報告

### ▶2011 年度拡大理事会

◇日 時：2011 年 12 月 18 日（日）10:00～12:00

◇会 場 龍谷大学・大阪梅田キャンパス 14 階

◇出席者：有本純，泉恵美子，佐久正秀，里井久輝，橋本健一，平井愛，大和知史，横川博一，吉田信介，今井裕之，大嶋秀樹，門田修平，清水裕子，玉井健，中井英民，長谷尚弥，真崎克彦，溝畑保之，藪内智，山本玲子，吉田晴世（21 名）

◇主な決議事項：新規事業「課題研究プロジェクト」は，外国語教育にかかわる基礎研究をテーマとしたプロジェクトで，学会からの依頼とし，年に 2 件程度，平成 23 年度は 1 件程度から始めることとする。プロジェクト・リーダーは，大学教員が望ましい。活動補助費は年間 10 万円程度とし，運営規定を理事会において別途定めることとする。平成 23 年度は，「英語運用スキルの自動化を図る理論的・実証的研究」（プロジェクト・リーダー：横川博一・神戸大学，研究期間 3 年）に決定した。

その他，新規事業「授業研究プロジェクト」および「研究会」は平成 24 年度の立ち上げに向けて準備を進めることが確認され，「KELES Journal（仮称）」は，拡大理事会において編集準備委員会を組織することなどが決定した。

### ▶2011 年度幹事会・臨時幹事会

2011 年度後期は，以下の日程で開催した：2011 年 10 月 15 日（土），2012 年 1 月 25 日（水），2 月 10 日（金），3 月 10 日（土）

## ◆紀要論文の投稿受付期間が変わります

すでにニュースレター，学会ホームページでお知らせしておりますように，関西英語教育学会紀要『英語教育研究』は，2012（平成 24）年度刊行の第 36 号から，投稿期限が 10 月末日から 8 月末日に変更されます。投稿をお考えの会員の皆様は，ご承知おき下さい。

## ◆全国英語教育学会第 38 回研究大会

全国英語教育学会第 38 回愛知研究大会が，2012 年 8 月 4 日（土）・5 日（日）に，愛知学院大学（日進キャンパス）において開催されます。

詳細は，次のサイトをご覧ください。

URL：http://www.jasele2012 aichi.jp/

## ◆学会費納入のお願い

2012 年度分の学会費は，2012 年 6 月 9 日に開催される研究大会までに納入をお願いします（研究大会での発表応募者は 4 月 20 日までに納入して下さい）。また，2011 年度分までの学会費が未納の方は至急納入をお願いいたします。年度末に刊行される学会紀要『英語教育研究（SELT）』第 35 号（4 月上旬に送付予定）は，納入が確認され次第発送させていただきます。

## ◆各種お問い合わせフォームについて

お問い合わせには，学会ホームページの各種お問い合わせフォームをご利用下さい。

URL: http://www.keles.jp/

### ▶会計関係お問い合わせフォーム

年会費の送金，過去の年会費の納入状況，「10 周年記念紀要 DVD」等についてのお問い合わせに本フォームをご利用下さい。

### ▶名簿関係お問い合わせフォーム

入退会に関するお問い合わせ，会員情報（住所・電話番号・電子メール）更新等には本フォームをご利用ください。

### ▶紀要関係お問い合わせフォーム

関西英語教育学会(KELES) 学会誌『英語教育研究』(SELT)，卒論・修論研究発表セミナーに関するお問い合わせには本フォームをご利用ください。

### ▶その他学会全般に関するお問い合わせ

学会ホームページ「事務局お問い合わせフォーム」をご利用下さい。または，学会事務局 yokokawa@kobe-u.ac.jp 宛（横川）までご連絡下さい。